



恋するキミへ

たなかひまわり

ここにいるよ

キミはすべてわかっている

心がついていかないだけ

「ひとりじゃないよ...」

そんな慰めは響かない

ここにいるよ

手を伸ばせば届くところにいる

安心して

キミは乗り越えられる

今は辛いかもしれないけど...

寂しさに震えてしまうかもしれないけど...

勇気を出して

諦めじゃない

新しいキミに生まれ変わるんだ

でもそれは

もともと キミが持っているもの

何も恐れなくていい

一歩を踏み出して

輝くキミを見せて

幻

心を乱されるもの 何も見ないで

幸せそうに見えるもの

人だけが持っているもの

それは幻

キミにとって必要じゃないもの

手に入れてみたら きっと

いらなかった ってキミは言うよ

わかってる

願いが叶わない

叶わないって思うことは

叶えない方がいいことなのかもしれない

本当は叶って欲しくないことなのかもしれない

意地になっているだけ

固執しているだけ

キミはわかってる

検証

疑う余地なし

実証済み

現状維持が最適

操作不要 または 不能

かなり特別

克服するのみ

ゆっくりと

欲しいと思っ込んでいるもの

それに繋がっている細くて切れそうな糸

キミはそれを大事そうに握り締めている

ぎゅっと掴んで離せないでいる

自分にはいらないうてわかってきたのに

心が言うことをきかない

いきなりポイツとなんて捨てられない

手の力を抜いてごらん

ゆっくりでいい

怖いだろうから

少しずつ

少しずつ

大丈夫

何もなくなりはしないから

キミらしく

ガマンはキミらしくない

耐え続けるのもキミらしくない

素直になろう

心を曇らす感情を殺さなくていい

思っていることを抑圧しないで

泣き叫んで

心を晴らそう

おいかけっこ

キミが前を走る

ボクが後を追う

並んで歩きたくても

追いつくとすぐに距離が遠くなる

でもボクはずっとキミを追い掛け続ける

キミが輝き続ける限り

バランス

こうなのかな

ああなのかな

キミはいつも頭を悩ませている

うーっとなり過ぎたあと

もう なんでもいい！ って叫んでた

それでいい

それが バランス

あまのじゃく

待っていると来ない

待たないと来る

あまのじゃく

もう待たないよ

でも 待ってる

虚像

怖いと思っているもの

見えている現実

でも それは

キミが作り上げた虚像

真実は目に見えない

時が教えてくれる

素直に

それは無理です

誰もが言う

そうですか...

そうですね...

静かに受け止める

腑に落ちない自分

ほんとは 無理じゃないって思ってる

認めてあげると すとんと落ちる

そっか...

諦めたくなかったんだ

やっとわかった

心からの願い

キミがいなくなったら

キミがいなくなったら抜け殻になる・・・？

冗談じゃない

ボクはそんなにヤワじゃない

ボクは ボクの道を行く

ボクは ボクのやりたいことをやる

ちくちくズキリ

怖くて行けない場所がある

いつもは忘れているのに

もう平気かな...

こっそり足を踏み入れてみる

ちくちく ズキリ

まだダメ

もう少し離れてる

痛みが消えるまで

永遠の謎

キミはボクの安心できる場所

キミがいればボクはぐっすり眠れる

キミという時は嫌なことを忘れられる

キミの安心できる場所は...

永遠の謎

キミがそばにいる

キミがそばにいる

恐いの

それを当たり前と思うこと

ボクは少しだけキミから距離を置く

二つとない大切なものを失わないために

またね

またね！

また いつ会えるかわからない

キミとのバイバイは勢いがいる

理屈

二人で過ごして

その日が過去になった途端

寂しさに押し潰されそうになる

それが嫌だからって

ずっと会わずに

楽しみを待ち続けてる方がいいだなんて

どういう理屈？

キミらしく

いつも笑顔のキミ

ボクは たまに

キミが心から笑っているのが不安になる

ボクは キミの心の声を理解していますか...？

怒ってくれていい

泣いてもいい

キミはキミらしくいてくれるだけで ボクは嬉しい

二つの影

未来を夢見ると苦しくなる

今が楽しければいい

キミはそう言って涼しげに笑う

希望

絶望

二つの影が見え隠れする

繋がり

見える繋がりでするより

見えない繋がり信じたい

一秒先の未来

明日はどんな日？

わかっているのは

キミに会えない日 ということ

ホントに？

もしかしたら

ひよんなことで ばったり なんてことがあるかもしれないのに

明日がどんな日か

決めてしまうのはやめよう

一秒先の未来は 誰にもわからない

心の隙間

ボクの心の隙間を埋められるもの

それは キミ だと思っていた

だけど違う

キミもその一部ではあるけれど

いないことで新たな隙間を作る存在でもある

二人でいたら幸せ

でも

一人でいても幸せ

本心からそうなれた時

ボクの心は満たされる

キミが求めるもの

キミのため…。

本当はボク自身のためじゃないのか。

この想いが自己満足になっていないか

いつも振り返る必要がある

キミは優しいから

ボクが何をしても笑顔を返してくれる

その裏で

時々小さくため息を吐いている

心の中で泣いている

キミが本当に求めていること

気づける自分でいたい

心の支え

めったに会わないし

電話もしない

メールさえも...

だけど

同じ空の下で生きている

ボクが キミを 好きでいる

それだけで

キミは ボクの 心の支え

空白

こだわることに疲れ

曖昧さの波に漂う

空白の時

死

未来を悲観したところで

または 夢見たところで

ボクは 明日 死んでしまうかもしれない

考えたくはないけど

キミが 遠くへ旅立ってしまうかもしれない

だったら

二人でいられるこの瞬間を楽しもう

幸せに過ごそう

当たり前じゃない 今日という日を...

見えないベール

自分とは異質なもの

それがあまりにも多すぎて

強敵すぎて

向き合うこと

優しく包み込むことに

疲れてしまったキミ

見えないベールで自分を覆い

今はただひたすら

負ってしまった傷を癒している

人と関わる事があれほど好きだったのに

淋しさより孤独を選んでしまう

キミがキミらしくいられる場所を

早く見つけられますように...

折り返し地点

同じところで

同じことを

いつもいつも 悩んでしまう

折り返し地点で

向こう側を見ながら

いつもいつも 足踏みをしてしまう

立ち止まっても仕方のないことを

見極める時がきたのかもしれない

そろそろ 今までの自分を

忘れてもいいのかもしれない

上書き

溢れるほどの情熱に

上書きされた挫折や失望

キミが冷淡に振舞う理由

もう 昔には戻れないと言う

もう 素直にはなれないと言う

ボクは無力さに苛まれる

雨

雨が降るたび

キミのことを思い出す

キミは空の色を左右する力があるんじゃないかって

今 キミは

いくつもの重荷を背負い

疲れ果て

身動きが取れなくなっている

助けを求めることさえ出来なくなっている

今日の空は どんよりと暗い影を落とし

静かに路面を濡らしている

雨はキミの心そのもの

ボクは雨に打たれながら キミの幸せを願う

キミを忘れる

キミがボクを忘れるように

ボクもキミを忘れてみよう

一人きりで海へ

風が頬を撫でる

波が足をくすぐる

太陽が冷えた体を温める

キミがボクにそうするように

海はボクを迎え入れる

ますますボクは 淋しくなる

グレー

あと少し

こうなればいい

ああじゃなきゃ

耐えられない

ないことばかりに目を向け

現実を嘆き続ける

欲張って

叶えたとして

歪が生じ

今あるものでさえ

失ったとしたら

キミは

後悔しないだろうか

それとも

失った方がまし

そう思うだろうか

季節

皆が一斉に心を弾ませる

季節ごとの彩りを

二人で過ごせないとキミは顔を曇らせる

でも

桜色の匂いや

凧だ青に差す一筋の光

キミの手を冷たく凍えさせる空気を

ボクは何度も 二人で感じてきた

キミと感じていたんだよ

素直になんか

素直になんかなれないよ...

キミが泣く

素直になんか...

心で泣く

一人で泣く

大丈夫だから

愛とか

夢とか

希望とか...

大好きだった言葉達

キミはどこに捨ててきてしまったの？

家族とか

仲間とか...

幸せそうな笑顔を目にするたび

ずっと背を向ける

心が悲鳴をあげる

見失わないで

キミもちゃんと持ってる

ちゃんと手にしている

涙で滲んで見えなくなっているだけ

大丈夫

大丈夫だから...

永遠

永遠なんてない

キミはそう言い切りながら

心の奥の

自分でもわからないくらい奥の方で

永遠を信じている

号泣

アリガトウ

アリガトウ

キミの優しさに

号泣してしまう

甘えさせてくれて

アリガトウ

ひとりにしないでくれて

アリガトウ

キミのなまえ

星の夜

一人きり

キミを待つ穏やかな時間

携帯に記されたキミの名前

ぼんやりと眺める

キミと出逢えた偶然

じんわりとかみ締める

離れていることには変わらないのだけど

不安だらけの日々にはなかった感覚

キミの名前は

キミが存在する証

ボクに幸せを与えてくれた証

幸せのカタチ

キミはキミを幸せにする

ボクはボクを幸せにする

キミがボクの幸せを祈る

ボクがキミの幸せを祈る

キミの幸せがボクの幸せ

ボクの幸せがキミの幸せ

ふたりの幸せのカタチ

想いを飲み込む

いつ 死んでもいい。

けっして悲観的ではなく

悔いなく生きてきた人生を

キミは穏やかに振り返る

ボクは頷くことなく

静かに受け止める

言い分を飲み込む

口に出さないでいるのは

キミの生き方を尊重したいから

キミを縛って苦しめるくらいなら

ボクの想いは伝わらなくていい

霧

一つの疑問があり

他者は一様に同じ答えを提示する

なぜ そう言い切れるのだろう

不思議でならない

でも いつか

これで良かったんだと思える答えが見つかるのだろう

こういうことだったのかと腑に落ちる日がくるのだろう

霧は晴れる

今は何も見えなくとも...

常識と言われること

同じことに対し

ある人はAといい

BだともCだともいう人もいる

自由な発想が飛び交う

だが

常識と名が付けられると状況が変わる

それから逸脱した行いをする

途端につまはじきに遭う

常識と言われることは

現代のこの場所で生きている人間が作ったに過ぎないのに

それが体に染み込んでいるに過ぎないのに

100人のうち

99人が認めている常識が

正しいと言い切ってしまうことはただのエゴだ

時が経つと 常識ではなくなるということが往々にしてあるのだ

自分と異質なものだ

表面的、一方向のみで判断し

罵声を浴びせ

多数だからという理由で99人を賞賛する

異種を否定的な言葉で排除しようとする

哀しいことだ

ボクは

どんなに敵を作っても

その1人になってしまっても

人を傷つけないということだけは心に留め

自分が正しいと思うことを貫き通す

それがボクの生きる道

無になる時間

自分は何者であるとか

どう生きるべきかとか

いっさいの思考を捨て

静けさに身を置き

ただ一点だけに持てる力のすべてを出す

自分が 無 になる時間

感情に振り回されないでいると

手にしているものが見えてくる

既に すべてを手に入れている自分に気づく

いつか素直に

いつか

なんの迷いもなく

素直になりたい

いつかだなんて

待つことない

今 素直になれ！

魂を癒す

また少しわからなくなってきた

自分で勝手に創り上げた苦しみの中で

じたばたともがいて動けなくなった

そんなときは

ほんと少しだけがんばって

ボクの魂が喜ぶことを見つける

ボクがボク自身を楽しませて

幸せにして

心を 喜びのピースで一つずつ埋めていく

それでも辛くなる時には

物事の動きをじっと観察すればいい

動いていないように見える周囲の動向を

どうなっていくのかと 映画のスクリーンを前にした時のように

委ねながら見ていればいい

そうしているうちに道は必ず拓ける

変化はゆっくり訪れる

それを焦らず待てばいい

いい波がきたら乗ればいいのだ

かつて

キミがそうしてきたように...

経験という名の荷物

自分を悲しくさせている事象は

すべて過去の経験からの記憶

それすらなければ

何を見ても 何を聞いても

ボクは平然としていられたはず

「経験なんて荷物」

誰かがそう言った

胸を締め付けられる経験からの記憶など

本当に いらぬ荷物だ

これからのボクを歪ませる経験を

きれいさっぱり捨ててやる

純粹に

まっすぐに 生きるために

心穏やかに

ほんの些細な希望でさえも

持つことが辛くなった

期待して待つことに疲れてしまった

近い未来 遠い未来

夢見ることにかみ過ぎていた

だが 悲観はしていない

過去や未来を嘆く力を失ったボクは

今、この時を楽しめるようになった

あらゆるもの

自分の前で起きていることに

ただ 向かい合う

成り行きを ただ 受け止める

「そうすれば必ずよい方向に向かう」

それすらも考えない

心穏やかに生きられることが

なによりの幸せ

すがすがしさ

いくら大変でも

納得のいかない

自分を押し殺した人生を送りたくない

そう決意してから一年

ボクはボクらしく生きている

確立されるには程遠いけど

どこか

すがすがしい自分がある

無でいること

頑張れば どうにかなること

どうにかしようと頑張っではいけないこと

キミとのことは後者

これまでのボクでは有り得ないこと

ただ 無 でいること

じっと立ち止まり

ややもすると激情に変わりそうな心を

吐く息にそっと乗せる

時々辛くなるけど

キミのそばにいるために必要なこと

過去の思い出

過去の思い出に浸っているキミ

ボクの知らないところへワープ中

そんなキミを見ていたくないから

ボクはそっと キミから離れる

ボクの胸のちくちくがなくなる頃

キミはここへ戻ってきている

いつもの調子で

いつもの笑顔で...

そうしたら また

そばにいるね

なりたい自分

キミは自分の世界観をつらつらと綴る

決して力まず

決して押し付けず

その中にひとつだけ 情熱を込めた言葉を忍ばせる

人はキミの言葉に心を動かされ 感銘を受ける

ボクも影響を受ける一人

キミに近づきたいと思う時

ボクの中の なりたい自分が目を覚ます

キミの言葉

何かにつけて

キミの言葉が思い浮かぶ

そうだ

そうすればいいんだね

ボクはキミに心の中で答える

キミとのことで迷う時もあるけど

キミに助けられるたび

支えられていることを知る

キミを必要としているボクがいる

後悔しない為に

遠い未来 何かしらの変化はあるにしても

明日という日は

今日と同じく 淡々と過ぎていくと思っていた

信じているという言葉も思い出さないほど

平穩を当たり前のこととして認識していた

だが それはとんだ思い違いだということを

ボクは哀しみとともに知ることとなる

明日には失うかもしれないものを

今 この瞬間には確かに手にしている

当たり前だと思っていることは

実は恵まれたものなのだ

後悔しないために

それに早く気づけますように

気づいたら いつも忘れませんように

答えは出ている

さまざまな角度からのアドバイスやメッセージ

ピンとくるもの こないもの

たとえ 世界的に有名な占い師が

「こうしなさい」

と言ったとしても

ボクがじっくりこないものはさらりと流す

もう既に

ボクは答えを出している

こうしたい という意志は

誰になんと言われようと変わらない

悩みのループ

結局のところ

ボクはどうしたいのだろう

一つ答えを出しても

すっきりしない自分がある

ある側面では解決したように思えても

別の側面ではNOなのだ

いつまでたっても答えが出ない

悩みのループはどこまでも続く

ふとボクは振り返る

何にも拘らない自分

墮ちている自分

ボクの中にはいろいろなボクがいる

しかも 秒単位でころころ変わる

三人三様 十人十色

大勢のボクが それぞれに自己主張する

答えが一つに収まるはずがない

ならば

前向きな時のボクのことを尊重しよう

きっと それで間違いない

安住の地

すべてを捨てて

どこか遠くの異国の地で暮らしたい

いくつもの苦しみに背を向け

ボクは逃げることばかり考えていた

ところが

ふとしたきっかけで夜が明けた

信じられないほど呆気なく

決して明けることのないと思っていた夜が明けた

同時に

頑強な鎖で絡み付いていた

一つの荷物がするりと落ちた

引っ張られるように

他の荷物も 次々に落ちてなくなっていく

ボクのいるこの場所で

あらためて 異国に行きたいか考える

安住の地は自分の心にあると知る

不思議な法則

欲しかったのに

躊躇している

当然手に入らない

やっぱり欲しい

迷いがなくなる

そこには一点の曇りもない

すると すんなり手中に収まる

不思議な法則

変わらないもの

変わらないとわかっているもの

特に他者に対して

それを何とかしようともがくより

今のまま

そのものを受け入れてしまった方が早い

すっきりするまでに

いろいろな葛藤があるけれど

信じてしまった方が楽

ボクはキミのことを誰よりもわかっていたいのだから

それくらい容易いはず

寡黙

寡黙なキミ

時々ボクは

キミが何を考えているのかわからなくなる

不安になる

そんな時

キミがボクにしてくれたことを思い出す

それは

純粋な愛に満ちている行為

言葉という形になりづらい行為

キミを信じている

そう言いながら心配になっている

言葉にしているボクの方が嘘つきだ

果報はつかみ取れ

果報は寝て待て。

ちょっとばかり待ってみたけど

ボクの性格からしてストレスになるだけ

自らチャンスを作り

失敗を恐れず ぐいぐい責める

その方がうまくいく

押し殺す

時折

どうしようもなく

心を締め付ける感情が沸き起こる

その度に

後ろ向きの自分を恥じ

必死で穏やかさを取り戻す

だが

押し殺した感情は

何かにつけ存在を露わにする

何年も 何年も

色褪せることなく

あの時と同じ苦しみをボクに与える

ボクは他者を許していないのではない

悲しむ自分を許していないのだ

悲しんではいけないと自分を抑えているのだ

ボクはまた 感情を押し殺そうとしている

許すことができずに

同じ場所で足搔いている

ボク自身が否定している限り

その感情は決して癒されることはない

GOサイン

どうしたらいいですか…。

自分の力ではどうしようもない時

あるいは どちらにしようか選択に迷う時

答えを天に委ねてみる

何日も

何か月も

何年も

答えが出るのを待つ

ある日のGOサイン

わかりやすく道は拓ける

迷いがなくなっている自分に気づく

動きなさいという啓示は突然やってくる

話を聞くよ

キミの苦しみはキミにしかわからない

思い通りにならない現状からの不安

いつまで続くかわからない恐怖

大丈夫だなんて

何を根拠に言えるんだという憤り

それらの感情を抱えながら

キミは一人 震えている

そばにいるよ

話をして

何度でも

同じ話でいいから

キミが心から笑えるその日まで

いや

心から笑えてからも

ずっと一緒だよ

見えていることだけで

見えていることだけで決めつけないで

自分が悲しいと思った相手の言動には

思いもよらない背景が隠されている

それはすぐにわかるものもあれば

数年の時を経て姿を現すものもある

だから

短気を起こして相手を責めないで

心の声に そっと耳を傾けて

雫

二人の絆

しっかりと繋がっている

キミの笑顔を見ていたら

信じられる気持ちが雫となって

心にすーっと浸み込んできた

何も心配のいらぬボクの居場所

キミとじゃないと味わえない幸せ

同じ月を見ている

同じ月を見ている

それぞれの空の下で

隣にいなくても

キミがそこにいてくれるだけでいい

ボロボロに疲れてしまっても

キミを思うだけで

ボクは再び立ち上がれる

心の支えという言葉に

命を吹き込んだのはキミだけ

乗り越えられない難問

孤独が怖くなくなって

一人でいることが平気になる時

ボクはキミのことを忘れてしまうのだろうか

キミとの温かい時間を知ってしまったから

キミといられないことで

ボクはとても寂しさを感じている

一人 時々 二人 は

ボクにとって何年も乗り越えられない難問

いつもそばにいるだけが愛じゃないとわかってはいるけれど...

不公平

どんな景色を見ても

どんな話を聞いても

キミがこれまでに話してくれた事に繋がってしまう

会えない時間を意識したくなくて

ボクだけの楽しみを見つけようとしているのに

忘れることないよと言わんばかりに

キミはいろいろな場面に登場する

ボクは不器用だから

キミをすっかりボクの中から追い出すことができない

キミは容易くボクを忘れられるというのに

野心

現状に満足する

一見 前向きなようだけど

ボクにとって 別の角度から見ると拷問

今日と同じ 機械的な明日

これ以上何も変わることもなく

ある意味 完結したような毎日

悪いことが起きないことが前提なのだけど...

いつ 命が果てても後悔しない日々を過ごしたい

でも 消え入る意識の中で

達成できずに悔やんでしまうくらいの野心を持ち続けたい

現状に満足することなく になりたい自分を見失いたくない

野望であろうとなんだらうと

一度定めた目標に向かって突き進んでいたい

今を楽しんでいないわけではないけれど...

今も幸せであることに間違いはないけれど...

願いは叶っている

自分の欲に素直になってみようか...

キミのことをいろいろと考えあぐねる

ボクの状況を照らし合わせる

...ブレーキをかけるボク

やはり 今以上は望めない

逆に言えば

叶えられる限りの願いは叶っている

これでいいのだ

何か変化が起きてきたら

その時にまた 前に進もう

他者に自分を見る

自ら楽しみを見つけ

時に共感を求めるも

すぐに自分の世界に戻っていく人

他人の反応だけに囚われ

認められることを目的とし

必死で作り笑いをする人

惹きつけられるのは前者

両者を目の当たりにして

他者は鏡だということを痛感する

今のボクは...

ただ愛しくなる

キミの髪を

頬を

唇を

そっと指でなぞる

ただそうしているだけで

愛しさがこみ上げる

頭を空っぽに出来るキミとの時間は

過去や未来に囚われることなく

今を生きることの大切さを思い出させてくれる

すべてから解放されたボクそのものになれる

避ける理由

誰もが魅了されるメロディ

ボクはどうしても好きになれない

ある日の出来事が

その曲と共に暗い影を落としていった

それ以来

聴くたびに 心が引き裂かれそうになる

癒されるはずの曲なのに...

憎しみとは程遠い曲なのに...

もう臆病にならない

臆病でいることが苦しかった

気持ちを殺し

人の顔色を伺い

笑顔を作る毎日

気が付けば いつも自分を否定している

当然うまくいくはずもなく挫折する

誰のせいでもない

自分の至らなさに悔し涙を流す

嫌われてもいい

思いついたまま

言いたいことを声にし

自分はここにいると主張しよう

これが本当のボクだと周囲に知らしめよう

少し勢いはいるけれど

リラックスすることを忘れずに

優しさもなくさずに

自分をひたすら信じて

ゆっくりと

はっきりした声で...

聖夜の奇跡

キミと同じ時代に生まれ

キミと出逢い

キミを好きになり

キミと過ごす時を持てる

すべて当たり前ではなく

奇跡的なこと

もう十分すぎるほどの幸せを

ボクは神様からもらっている

好きな人がいる

それだけのことが どんなに恵まれたことかをボクは知っている

奇跡はもう 起きている

キミに追いつくために

この心のざわざわしたものが

いつになったらなくなるのだろう

キミの世界が広がるたび

一歩も進めないボクはおいてけぼりを喰らう

早くキミと同じフィールドに立ちたい

目指すものは違っても

キミと同じ目の高さで話がしたい

ボクは今出来ることを一つ一つこなしていく

キミに追いつくために

ボクの成長のために

揺り起こせ

心を突き動かすものに

もう一度 この身を委ねたい

いつからか ボクは冬眠しているかのように

ぼんやりと薄目を開け

称賛される人々を他人事として眺めている

ボクはこんな人間ではないはずだ

次々と現れる壁を乗り越えるための

体の奥底に沸々として溜まっているエネルギーが行き場を探している

どんよりと待っているだけの生活にはもう飽き飽きだ

精力的に突き進む自分を揺り起こせ

神様の忠告

助けて...

その声は

誰にも届くことなく

宙を舞う

手を差し伸べてもらえないのは

自分で解決できることだから

甘えるなという

神様の忠告

呆れるほどに

気持ちが落ち着かないのなら

とことん

もがいてみるのもいい

冷静でなんかいられない

呆れるほどの子どもでいよう

どうしようもない自分も

紛れもないボクの一部

絶望したまま前へ

手に入らないものを諦めるために

別の志で埋め合わせる

満たされないのがわかっていながら

ボクは足掻き続ける

それとも

何かが達成された時

今 欲しいと思うものではなくても

満足することができるのだろうか

わからないまま...

絶望したまま

ボクは前に進む

遠くて近い道

誰が何と言おうと

ぶれることがなければ

然るべき時

きっかけが見つかり

道は拓ける

暗闇にいと

ひとりぼっちにしか思えない

でも きっとどこかで

見守ってくれている人がいる

墮ちていると

そんなことなど信じられないけど

ひよんなことから

ずっと見てていてくれた事を知る

何度も挫折しながら

間違っていないかと迷いながら

地道に一步ずつ

積み重ねていくことだけをひたすら続ける

ひたすら

ひたすら

自分を信じて...

それが夢を叶える遠くて近い道

本能

抑えきれない衝動

制御不能

情熱の赴くままに...

その方がきっと...

ボクが抱いていたキミの幻想

今 少し離れているところにいるのが本当のキミ

キミのことを理解したくて

キミとの距離を縮めたくて

もがくほど キミは離れていった

ここで立ち止まるのもいいかもしれない

どこへいってしまうかわからないキミを

時々見失うのもいいかもしれない

その方がきっと仲良くいられる

その方がキミに嫌な思いをさせずに済む

その方が...

安心のしるし

なんて無防備な格好

なんて無邪気な顔

キミはすやすやと寝息を立てている

ボクはそーっと近づいてキス

それでも目を覚まさない

普通起きるでしょ

どれだけ疲れてるの？

いいよ

安心しててくれてる しるしをありがとう

時期尚早

無理 無理 無理 無理

絶対 無理

出来ないよ

進めない

つい忘れて

これまでと同じように突き進みそうになるけど

今はまだ時期尚早

待たなきゃ

これは臆病なんかじゃないよね

珍しく慎重になってるだけ

動き始める

じたばたして

思い切りもがいて

思いつくこと端からやってたら

上向きになってきた

物事が動き始めた感触

静観していた別の問題も

勝手に解決の方向へ

やっぱり運は自分で持ち上げるものなんだ

待ちながらも

暗い顔しながらも

くーっと落ち込みながらも

踏ん張って ぐいっと持ち上げればいいんだ

正直 すごく苦しかったよ

でも すこーんと抜ける時は絶対に来る！

特殊な感覚

辛いと言われていることを

さらりと流す

無理しているわけでもなく

意地を張っているわけでもない

ボクは冷たいのだろうか...

立ち止まろう

やらなければ...と物事に追われ

ずっと突っ走ってきた毎日

自分でもわからないうちに

気持ちが荒んでいた

人に優しく出来ない...

ボクにとって一番悲しいこと

ひとまず立ち止まろう

罪悪感など持たずに...

これでいい

これでいいんだ

見失ってるだけ

どうでもいい

どうでもいい

どうでもいい...

念仏のように唱え続ける

ボクに絡みつく苦しみの根源を振り払うために

あんなものいらない

こんなものいらない

欲のすべてをかなぐり捨てる

本当は欲しくてたまらないのに

待てよ

欲しいと思っているものがなくても

ボクはこうして生きている

ボクはただ

穏やかでいたいだけ

欲しいと思っ込んでいるものは

最後に手に入れたいと思うものの前段階に過ぎない

それならボクの中にあるじゃないか

それに気づけばいいこと

見失っているだけのこと

きっと嘘をつく

ボクは時々嘘をつく

無理矢理キミに背を向け

強い振りをする

そうすることで感じるのは

徐々に大きくなる違和感だけ

苦しくなって

ボクは本心を見せる

キミは何もなかったように笑顔を見せる

ボクは胸のつかえが下りる

もう 嘘はつかない

もう 嘘はつけない

そう思うのだけど...

きっとまた ボクは嘘をつく

キミとのバランスを保つために

何百回

もういいや

何百回呟いただろう

まだよくないよ

何百回引き留めただろう

いいよ

そのうち すとんと納得する日が来る

考えなくても決められる日が来る

キミなりのやり方

キミはキミが思ったようにやればいい

マニュアルは一つの方法論

自分の感覚とずれていたら

真似をしようとしても何かしっくりこないはず

人の常識に囚われていたら

最後まで貫けないはず

自分の信念を軸にして

キミなりのやり方で前に進もう

それはすぐに見つからないかもしれない

でも

迷っているうちに

悩んでいるうちに

諦めなければ きっと見つかる

忘れていること

毎日毎日飽きもせず

どうしてこうも

不毛なことを考えられるのだろう

それだけ平和だってこと

食べることに困ってないってこと

屋根のある家に住んでいるってこと

お風呂に入れるってこと

五体満足だってこと

もったいないね このエネルギー

もっと楽しいことに使おう。

行動あるのみ

考えて

考えて

考え尽くして

堂々巡りだと気付く

考えても答えは出ない

行動あるのみ

キミの声が流れる

キミからの問い掛け

思いがけない一言

ボクは一瞬戸惑い

でも すぐに答えたくて

ありきたりな言葉を返す

違う と思い返し

心を込めてもう一度

心地良い胸の痛みと共に

今でも耳にキミの声が流れる

誰もキミを責めない

困っている人がいると

助けずにはられないキミ

問題が起きると

あの手この手で解決してしまうキミ

留まることなく空いた時間を埋めていく

そのバイタリティに感服しているボクだけど...

倒れこむように眠りにつくキミを知っている

誰も見ていない時は

疲れた体を引きずっているキミを知っている

キミの体もキミの助けを求めている

今 キミの中で問題が起きている

だから

休むことに罪悪を感じることなく

そっと目を閉じ

体からの声を聴いてあげて

誰もキミを責めたりしないから

大丈夫

失うということ

失ってもいいのか

失うことで

苦しみから逃れられるのか

キミがいなくなる空虚な世界

すべては

今あるものを忘れてしまうことから始まる過ち

コンクリートに咲く花

キミと行った山の空気

冷たくも優しくボクを包み

細胞の一つ一つを瑞々しく浄化する

それに比べ

都会の空気は淀みきっている

心を蝕んでいく

ボクは今 呼吸が出来ない

コンクリートの隙間に咲く小さな花に

幸せなのだろうか...と 思いを懸ける

生まれ変わるまでもなく

会えない日の方が多いけども

一緒にいられる時間が限られてても

生まれ変わるまでもなく

キミといられる幸せ

旅に出たら

今 一人で旅に出たら...

海が見たくて

知らない海が見たくて一人で旅に出たら

さみし過ぎて

死んでしまうかもしれない

でも

頼れない

頼らない

半分だけ

半分だけ自分を満たす

それで幸せ

呪文のように唱える

何度も 何度も

毎日 毎日

色褪せているように見えた景色

彩りを与えるのはボク次第

手を伸ばせば届くのに

欲しているものじゃないがために

あえて手に入れなかったもの

一つ 一つ

手にしていこう

そうすれば

何か変わるかもしれない

愛でいること

ただ思い

光が射す瞬間を

真っ白な空間の中で

穏やかに

待たずして待つ

ただ 愛 でいること

闇の果て

こうでありたい

その想いは何があるかと

心の深く 奥の方で形を崩すことはない

だが

抵抗する物質が現れ

心のフィルターで引っかかり

いつまでも存在を消そうとしない時

ボクはそれに囚われ

戸惑い

全身の力を奪われる

苦しみ もがき

すぎる思いで手を伸ばす

差し出される無数の手

天使の顔をした 刃を隠し持つ手もある

ボクの手と心を切り刻み

血がしたたり落ちるのを見遣ると

不敵な笑みを浮かべ背を向ける

真の支えになり得る手は

何事もないような顔をして

すんなりとフィルターを通り抜け

ボクの心に灯を蘇らせる

傷を癒し 安堵する

惑わされることのない平穩を保つ心には

形を崩すことのない 強い意志を持った想いが姿を現す

枯れかけた花

枯れかけた花

頭をもたげ

目前の死を見つめている

だが

枯れかけているのと

枯れてしまったのとでは

雲泥の差がある

枯れかけてはいても

懸命に水を吸い上げ

まだ やることがあるとでも言いたげに

花びらを潤わせ 輝きを放っている

自らの可能性を信じている

ボクも諦めない

この花のように

色褪せた赤い糸

重く色褪せ

薬指に垂れ下がる赤い糸

そんなものに

キミはいつまで こだわり続けるの...?

辛い時ほど

すぐに忘れて

独りでいることを嘆く

心にエゴの渦が巻く

辛い時ほど

キミのために何ができるかを考えよう

そうすればまた

温かく優しい力が湧いてくる

愛で満たされる

夢ではなくなる

現実に見える世界が

実は仮想世界で

頭の中で考える理想が

実は現実で

すべて夢ではなくなる

すでに夢ではなくなっている

そんなありえないと思える話

信じてみようか

それが思い通りにする最後の方法なら

逃げてる

そうだよ

ボクは逃げてる

傷つくことに

今は耐えられないんだ

この場に立っているのが精一杯

もう少し力が戻ってきたら

また キミを幸せにする

だから...

幸せへのプロセス

これまで頑なに願っていたことが

はたして本当に幸せなのか

わからなくなった

自分はどうなりたいのか

自分はどうありたいのか

全くわからない

それなら

なるがままに身を任せ

事の成り行きを見ていよう

思い描いていたことと違ってても

それがベストな状態なのだ

きっと 良いようにしかならない

そう信じて

時の流れを見ていよう

寂しくても辛くても

すべては幸せへのプロセス

最強の味方

自分の心を

ふんわり優しく包み込もう

どんなにネガティブな想いでもいい

誰かに向かって優等生になって

無理して前を向いて

虚勢を張る必要なんかない

そんなことしたって悲しみは消えない

自分の心を人にわかってもらう必要はないんだ

自分だけが自分をわかってあげればいい

体に力が入らないほど落ち込んでも

求めた時に受け止めてくれる

自分は自分のそばにいる

いつでも

どこでも

何日でも

何年でも

本当に前を向けるまで見守ってしてくれる

最強の味方

最後の恋

待ち構える

数々の壁を

嘆くことなく

ひとつひとつ

乗り越えていけばいい

キミが

どう思っていようと

ボクに覚悟さえあればいい

ただそれだけ

たったそれだけのこと

これが

最後の恋なら...

そのままのキミを

キミの気持ちの行方に

期待するのをやめた

なんでもかんでも

キミに頼るのをやめた

こうなったらいい が なくなったら

不安が幸せに変化した

焦る心は

手にあるものを不鮮明にする

ボクはもう

そのままのキミを見失わない

曇った空は

曇った空は

誰かのせいにしても

晴れ渡ることはない

雨もふらず

風も吹かず

ただそこにいるしかない日は

そっと目を閉じ

草木に流れる命の音を聴く

陽が沈み

陽が昇り

それでもなお空が曇っても

誰のせいでもない

ましてや

キミのせいでもない

わかっているのは

不変はないということ

必ず

心を潤す雨が降る

気持ちを震わす風が吹く

身体を温める光が差す

キミのもとにも 必ず...

レコーダー

なんでもすぐに忘れるボクのあたま

キミの言葉と映像だけ

記憶する場所が違うみたい

優しいものも

学べるものも

棘のあるものも

全部ひっくるめて取り込む

再生しては

にやにやしたり

感心したり

ぐさぐさきたり...

消去できないのが難点

『人は忘却の生き物』

キミのことだけは当てはまらない

キミの言葉と映像は

キミの分身

ボクの大切な宝物

いらないうって思うものも

きっとボクには必要なもの

キミを大切にするために

いやなことを

いやだというと

キミを責めてしまうようで

言えずにいる

ただでさえ

苦しんでいるキミを

ボクが困らせてはいけない

キミがそう言ったことは

本意じゃないから

さらりと流しておけばいい

そう思ってしまう

そう思いながら

流せずにいる

ボクはボクを苦しめている

ボク自身

自分を我慢させることは

自分を大切にしないこと

自分を愛さないこと

自分を大切にできないのに

人を大切にできるのか

自分を愛せないのに

人を愛せるのか

自分の愛を受け取れないのに

人の愛を受け取れるのか

ボクはキミを大切にしたい

ボクはキミを愛したい

ボクはキミの愛を受け取りたい

素直になろう

いやなことはいやだと

キミに言おう

キミがどう応えるのか

とても怖いけど

キミを責めるのではない

ボクが感じたことをキミに伝えるだけ

ありのままのボクを見せるだけ

ありのままのボクで

キミと向き合いたいだけ

ボクを大切にするために

キミを大切にするために

未来からのメッセージ

何年も前

淋しくて

辛くて

落ちている自分がいた

そんな自分に

「だいじょうぶ

あなたは だいじょうぶだよ」

と 言ってみた

過去の自分のところへ...

ふと 思った

未来の自分もここにきて

今の自分を見守っているんじゃないかと

「だいじょうぶ

あなたは だいじょうぶだよ」

未来から 今の自分のところへ...

ひとりじゃない

過去の自分には今の自分がついている

今の自分には未来の自分がついている

だから 強くいられる

キミには言わない

考えたくないことを

ぜんぶ とっばらって

一番最初に思うこと

それを

キミには言わない

ぜったいに

言わない

キミがスキだー！

なんて

ぜったいに

言わない

幸せになって

何かにつけて

心にブレーキをかけてしまう

幸せになっていいんだよ

すぐに背を向けるのは

もう おしまい

生きていて

キミが悪いんじゃない

すべてボクのがまま

わかっているから

わかっているけど

もやもやが消えない

キミのせいにしてみたり

自分を責めてみたり

いったりきたり

ぐるぐると堂々巡り

でも

どれもこれも

キミがそこで生きているという前提

キミが死んだら

やきもち焼いたり

今度はいつ会えるのか途方にくれたり

突き放す言葉に傷ついたり

何も動かない日々にイライラしたり

嫌だなんて思うことも全部できなくなる

生きていてくれるだけでいい

生きていてくれたら

希望を持てる

またいつかを夢見ることができる

手にしていないものより

手にしているものを大切にすることを忘れないで

不満に思えるものも

生きていてくれるからこそ生まれるもの

在ることを当たり前には思ってはいけない

キミが 生きていてくれることを当たり前には思ってはいけない

進む道

ボクが進む道

誰かがいるとか

いないとか

そんなことは関係ない

目を閉じて

暗闇の中に自分を置いて

独りになった状態で

進む道を探す

いや

探すまでもなく

自然と見えてくるものなのかもしれない

ただそれは

心静かにできた時

周りの雑念に惑わされない時

初めはキミの足だった

初めはキミの足だった

しかも足の裏

正座しているキミの足

何かを踏んだと思ったら

キミの足だった

キミは振り向きもしなかったから

たぶん気づかなかったんだろう

ボクも小声で謝っただけ

通り過ぎておしまい

それが最初

なんてことのない一瞬のできごと

それでもなぜか

あの時の足が脳裏に焼き付いている

音声付きはキミだけ

キミという存在を

それほどまだ意識していなかった頃

ボクは今のよう

一生懸命

キミの話を聞こうとしなかった

それなのに

あの時キミが投げかけてくれた言葉を

ボクは鮮明に思い出すことができる

他の誰かのことは

映像では覚えているけど

音声付きはキミだけ

なんでだろう

とても不思議

自分から背いている

「そんなことで悩んじゃいけない」

「もっと頑張らなくちゃいけない」

そうやって

苦しんでいる自分に鞭を打つ

悩んでいいんだよ

苦しいのは当然

だって

キミにとってすごく重要なことなんだから

溺れかけて

もがいて もがいて

更に深みにはまって

どうしようもなくなってからでもいいから

その悩みがちっぽけじゃないってことを

認めてあげて

その辛さは

自分が自分から背いている辛さかもしれない

これ以上

自分をいじめないで

楽しんでいるボクでいる方が

「キミの夢を応援してるから

淋しいけど我慢する」

そんなことを言われたら

応援されていることよりも

淋しい思いをさせていることに

キミは重荷を感じてしまうだろう

それよりも

生きがいや

夢や

目標に向かって

イキイキと楽しんでいるボクでいる方が

安心するし 楽だよな？

ってことが

自分を輝かせることが 相手のためになる

ってことだ

めざす未来へ

覚悟を決めて

一歩踏み出す

先の見えない世界

ぬるま湯に浸ってれば

安心は手中にあるものの

切り拓く面白みもなく

まして

輝くことなど絶対にできない

それでいいのか

それがいいのか

答えはNOだ

守られていた安全なところから

孤独にさらされる領域へ

目指す未来へ

足踏みをしているようでも

がむしゃらに

がんばって

がんばって

がんばって...

好きなこと

これだけは譲れないこと

自分にはこれしかないということは

足踏みをしているように思えても

ひたすら

前へ

前へ

前へ...

疲れても

迷うという言葉が存在しない

悩むという言葉が存在しない

諦めるという言葉が存在しない

強固な想い

生きている限り

安らぎの中で眠れるように

ボクは

キミの心に寄り添えているだろうか

様々な想いを積み重ね

時間という道を歩き

複雑に感情を絡み合わせながら

今日という日を迎えた

キミが隠した涙の意味を

ボクは知る由もない

無理に笑っていることも

大丈夫じゃないことも...

でも 心はそばにいる

キミが呼んでくれたら飛んでいく

安らぎの中で眠れるように

穏やかな朝を迎えられるように

すっとんと落ちてきたもの

溢れる情報

思想

価値観

すべてをわかろうとしなくていい

違和感を覚えるものは

ひとまず そこに置いておこう

いずれ

わかる時がくるかもしれないし

一生 受け入れずに終わるかもしれない

なんの抵抗もなく

心にすっとんと落ちてきたもの

しっかりと感じたもの

それが

今 必要なメッセージ

今のキミが求めているもの

キミのこと待ってるよ

何時に終わるかわからない って

来るなって言われた訳じゃないんだね？

機嫌 悪かったよ？

気を許してる証拠

じゃあ どうしたらいい？

迷わず GO！

待ってるよ キミのこと

もしかすると いらぬもの

入学すること

入社すること

結婚することがゴールじゃない

そこからまた

何を学びたいか

何を成し遂げたいか

何を大切にしたいか

これまで自分がしてきたこと

これまで自分がしてこなかったことを

続けたり

新しく始めるための通過点でしかない

そう考えて

自分がどこに向かいたいのか

どうありたいのかが見えてくると

こだわっているものが

さほど重要じゃなかったりする

もしかすると

いないものだったりする

嘘で隠す

まだ自分をダマすつもり？

思い切り悩んだり

辛くなったり

落ち込んだりするの

どうしてだと思ってる？

それだけ真剣で

一途で

大切にしているからでしょ

それを

無理やり諦めようとしたり

消し去ろうとしたり

想いと反対なことを言ってみたり

嘘で隠そうとしている

本当にどうでもいいものだったら

今みたいなキミはいない

頭から消えないことに

それだけの情熱を傾ける

キミはいないよ

無理に笑わないで

辛いことばかりに目を向けて

きゅーっと心痛めてる

少し意識をそらして

風

音

匂い

温もり

近くにあるものを感じてみて

キミを包み込むもの

胸にすんなり染み込んでくるものを

必ず見つけられるから

これかな

あれかなと

迷うことなく

これだ と思えるものに

必ず出逢えるから

その時まで

無理して笑わないで大丈夫

光を掴むまで

消えない空虚感

寄り添う愛さえあれば...

愛さえ手にいれれば...

満たされるのだろうか

ボクは満足するのだろうか

何も進んでいかないように見える現状に

焦りを感じ

不安を拭いたくて

問題をすり替えている

じりじりと足を進めるしかない

暗闇を抜けるまで

光を掴むまで

こっちを見てって言えない

がんばらなきゃ

がんばった証拠がなきゃ

がんばった結果が出なきゃ

こっちを見てもらえない気がする

だから

何もしていない自分だと

何も進んでいない自分だと

何も変わらない自分だと

こっちを見てって言えない

...きっと そうじゃないよね

そうじゃないって信じたいけど

できない自分がある

ひとりで生きていけるかな

ひとりで 生きていけるかな

いけないって言ったところで

生きていかなきゃいけないよね

なんとかなるよ

だいじょうぶ

きっと

きっとそれがボク達の幸せ

わたしたちは どうなるんだろう...

キミが呟く

ここでボクが

思い切りポジティブなこと

または

思い切りネガティブなことを言ったとしても

未来は誰にもわからないし

操作することもできない

予想だにしない満ち足りた世界が待っているかもしれないし

地べたに崩れ落ちて 起き上がれなくなる世界が待っているかもしれない

だから

ただこの今を

穏やかに

和やかに

過ごしていければ いいのかな...

そうするしかないんだよ

なるようになるんだから

ボクたちは

誰のことも不幸にしないように

それだけを考えていけばいいんじゃないのかな

それがきっと

ボクたちの幸せなんだよ

ボクはそう思う

自分にそう思い込ませようとしているだけかもしれないけど...

自分でもよくわからないけれど...

きっといつか

ふわっと目の前が開ける時が来る

そんな気がするよ

ひとりでいいよ

どこかのグループに属したところで

無理にテンション上げて

取り繕ってるだけ

居場所を求めるから焦るんだ

ここにあるじゃん

安心していただけるこの場所が

誰かといないとつまらないってのは思い込み

誰かと繋がっていないと不安ってのも思い込み

誰かと一緒にいたって孤独を感じてたんだから

一人でいても孤独じゃなくなるなんて簡単

ひとりでいいか

一人が嫌だって思ってたから苦しかったんだ

一人でいちゃいけないとさえ思ってなかった？

一人でいいよって思ったら楽になったでしょ

今まで

ずっと一匹狼だったじゃん

わざとはみ出したりして

それが自分なんだもん

わいわいやろうってのがそもそもの間違い

じっと静かにしててみ

ほら 空気が体を包み込んでる...

破壊者

キミがボクを苦しめているだなんて

信じたくなかった

キミのことでボクが苦しむだなんて

否定していたかった

でも

信じないことが

否定することが

苦しみの元凶だった

そのまま認めてしまえばいいんだ

「キミはボクを苦しめる人」

「苦しめることでボクを成長させる人」

「古くなったボクの価値観を破壊する人」

そう思うようになってから

キミが何を言っても平気になった

ボクは苦しまなくなった

キミそのものを受け止められるようになった

いっしょにいるだけで

いっしょにいるだけで

やさしくなれる

おだやかになれる

じわっとあたたかくなる

はなれていても

あなたのこえをおもいだすと

うれしくなって ほほがゆるむ

からだのちからが すっとぬける

もしも いっしょにくらせたら

まいにち わらってばかりいるかな

わらって わらって わらいつかれて

あなたに よりそってねむるの

いつのまにか あなたもねむってて

めざめたあとは ふたりいっしょに げんきふっかつ

たのしいことを みつけにいこうよ

しらないばしょへ たんけんにいこう

あなたといっしょにいるだけで

こころのおくが ほっとする

はなれていても

あなたは わたしの しあわせそのもの

つよがり

すき？ と いうかわりに げんき？ と きいてみる

かまって というかわりに おちゃをだしてみる

さみしい と いうかわりに ちょっと つくりえがお

めが はてなになってたけど

ふりむいてくれたから いいことにする

ひとりのじかん

声が聞きたくて

でも願いが叶わない時

あなたに似た声を

テレビの中から探す

会えなくて

でも顔が見たくなった時

持っているたった一枚の写真を

ずっとずっと眺めてる

触れたくて

でも遠く離れている時

自分の左手に 関節ひとつ分下げて

右手を重ねてる

私の指の関節ひとつ分大きい手に

早く包まれたい

ゆめのはなし

ゆめのはなしだから

くびをよこにふらないで

やくそくじゃないから

ひていしないで

もしあなたがとおくにいくのなら

わたしもいっしょにつれて行って

しんぱいごとも

きにやむことも

すべてなくなったら

ずっとそばにいさせて

ゆめのはなしだから

やくそくじゃないから

くびをよこにふらないで

記念日

密度を凝縮し 人々の肺の中へ

その存在を知らしめるかのように冷え切った空気

雲の切れ間から 地上へ降り立つ光

別の陽光に照らされて 自らが輝きを放っているかのような山々

差し出された暖かな温もり

気負いを取り去る穏やかな声

私を包み込む愛するもの

五感で感じられる森羅万象を

幸福と置き換えている自分

二度と来ることのない今日という日を

私は一生 忘れない

支えることば

「凹んでないで

前向いて

気楽に行こうよ」

笑顔と優しい声で

いつも励ましてくれる

すぐに落ち込む私は

あなたの言葉に 何度も救われた

「落とす悪魔に負けないために

何かに打ち込み 誰かを愛す」

誰かじゃなくて

あなたを愛したい

でも 声に出して言えない

拒絶されることが 恐くてたまらない

「甘えていいよ

甘えたい時は素直に」

弱ってた時だったから ジンときた

でも 甘えだすとキリがないから

強くなるね ひまわりみたいに

いつでも太陽に向かって 凜として

親友へ

またうじうじが始まった

暗い顔してたら誰だって近寄りたくなるよ

くやしかったら元気になってごらん

前向きにいろんなことやってごらん

ぼーっと考えてると　どんどん落ち込むよ

だから他の事に目を向けてごらん

最初は無理してでもいい

そのうち楽しくなってくるよ

空元気　得意でしょ？

それがいつのまにかホントの元気になるから

自分で苦しくなるほどの愛情持ちゃダメ

それさえなければ　あっさりしてるのに

意識しないようにしようよ

そうすれば人並みの愛情になる

いつだってそうじゃない

きっぱり諦めると仲良くしてもらえる

気持ちが冷めてるから　気軽に付き合える

好かれようなんて気持ちなくなるから　クールでいられる

それからじゃ遅いんだけどね

難しいよね （今は必要とされてない時期なんだよ）

そのままの愛情 受けてもらえればいいのにね （きっとまた振り向いてくれるよ）

決心

一人で平気。

笑って呟いた私の心の中みえる？

あなたは自分の世界を持ってる人

支えになりたいなんてただの思い上がりだった

淋しさを埋めるために寄りかかっているだけだった

振りほどいた手

それがあなたの気持ちだね

あなたの夢の中に私はいない

海で暮らしたいといったあなたの隣りに

私の居場所はないんだね

あなたが見ていてくれているから頑張れた

心を開いてくれるのをどこかで待ってた

だけど あなたの自由を邪魔するだけだった

覚悟を決めなきゃ

あなたがすべてだった昨日にさよなら

あなたのこと 忘れるよ

あなたから離れられたら

大切な友達の一人になれるかもしれない

いっそのこと

いっそのこと嫌われちゃえ

しつこくして

嫉妬して

わがままいって

愛を押し付けて

これなら完璧

あなたは私から離れていく

いつもみていて欲しいけど

叶わない事だから

あなたに恋をしていることが

こんなにも苦しくて 切ない

一人占めしたい

束縛したい

甘えたい

でもそれはあなたを殺す事と同じ

だからいっそのこと あなたを嫌いになりたい

あなたのことを忘れない

それが出来ない私は

毎日必死で 自分を殺す

ひとやすみ

友達と思おう ほら楽になった

恋人だと思おうから 依存するんだ

友達なら 連絡が遅くても気にならない

...友達の方が即レスだけどね

忙しいだけ 忘れられたんじゃない

待ってみよう

いつまで信じていられるか

自分を試してみよう

空回りしてると思ったら

少し離れてみるのもいい

きっと取り越し苦労で終る

「へ？ 何の話？」 そう言われるよ

疲れた時はひとやすみ

ずっと走ってきたからね

空元気出せる時もあるけど

たまにはゆっくり スローライフ

ほんとは

あなたを前にすると 何も言えなくなる

いつもは すごくおしゃべりなのに

心の中に溜め込んで

ちくちくとした胸の痛みを耐える

「他の子に優しくしないで」

こんな事を言ったら愛想をつかされる

もう会ってもらえなくなる

ホントの気持ちが後ずさりする

悪気はないよね

わかっているから責められない

彼女はただの友達だよ

でも心の中に雨雲が立ち込める

楽しそうなあなたを見ていると

何でもない振りをしてしまう

「おまえが一番なんだよ」

そう言ってくれたら 安心できるのに

嘘

毎日なんて会いたくないし

電話で声も聞きたくない

メールなんて するのももらうのも面倒

ひとりの時間が一番キラク

「忙しくて連絡できないんだ」

ごめんと謝るあなた

「大丈夫 私も忙しいの」

ほんとはちっとも忙しくなんかない

いつまで強がるつもりなんだろう

「距離があったほうがいい」

初めに言ったのは私だった

どうしてそんな嘘をついたんだろう

いつも触れていたいほど 甘ったれなのに

声を聞いていないと不安になるのに

淋しい時に一人でいると 気が狂いそうになるのに・・・

素直になりたい

でも素直になれない

嘘つきの私

決意

あなたを振り向かせたくて

夢を語って 虚勢だけ張ってた

自分じゃなくて あなた中心の心

ひとりにならなくちゃ

あなたから離れなくちゃ

そうしなくちゃ 本当の自分になれない

あなたが遠くに行ってしまう気がして

淋しくて泣いてた

震える体を抱きしめてた

口実を作っては あなたと繋がろうとしてた

心はいつもそばにいと信じたいけど

今の私はあなたに依存してるだけ

何もない私に手を差し伸べるほど

あなたはお人よしじゃない

あなたも大きな夢を持ってる

それに向かって突き進んでる

負けないようにしたい

あなたに「がんばったね」って言われたい

あなたにふさわしい人になりたい

胸を張って堂々と 隣りにいられる人になりたい

信じる者は

さっきまで腑抜けだったのにな

待っててよかった

心は繋がってる

私を思い出してくれた

忙しいだけだった

てんてこまいしてる姿が浮かぶよう

忘れられていなかった

ほっとひと安心

信じるものは救われる……なんて

少し疑ってたくせに

嫌われちゃったかもしれないって

不安で仕方がなかったくせに

もうヤキモチなんて焼かない

そばにいられなくなる方が辛い

大声で歌いたい気分

なんだかおなかも空いてきた

無口な理由

離れている時は 言葉が溢れてくるのに

一緒にいると なぜか無口

どうしてか わかる？

あなた ずっとひっきりなしに話してるんだもん

私が入る隙間がまったくないの

そんなこと言ったら 機嫌損ねちゃうね

だから黙って聞いている

それも嬉しいことだから

やっぱり時々 会話がしたくて

話しが途切れる瞬間を狙う

やっとのことで「あのね」っていうと

「ん？」って耳を傾けてくれる

ゆっくりしか話せない

一生懸命 ひとつこと ふたこと

言い終えて あなたの笑顔みて

上気してる私

いつもいっしょにいられたら

小さく切り取った私の気持ち

溜め込まずにひとつずつ

伝えられるのに

学校に行かなくていい

もしキミが

学校に行きたくないと思っているなら

学校になんか行かなくていい

勉強は大人になってからでも出来る

80歳の大学生だっているんだぞ

一生 勉強なんかしたくない

もちろん それでもいい

キミが決めること

誰かに決めてもらうことではない

やりたいことが見つかると

それを詳しく知りたくなる

勝手に勉強したくなる

キミが学校に行かないことで

親や兄弟が

悲しんだり

叱ったりしても

それらの言葉が心に悲しく響いたら

しばらく耳をふさいでもいい

キミの心と対話していよう

学校へ行くだけが生きる道じゃない

幾通りもの生き方がある

同い年の大多数が進む道

それが 普通 だなんてこと

そう言葉にしている人の思い込みにしかすぎない

周りの人と違う道を選ぶこと

学校に行かない選択をすること

それはとても勇気のいること

自分を大切にしていること

もう一度 学校に行こうと選択すること

それも勇気のいること

自分を大切にしていること

つまり 自分の意志を尊重すればいいこと

自らのレールを敷いていく作業は

壁にぶつかることも多いかもしれない

やらされるのではなく

自分でやるという選択は

次々に現れる壁を

ある時は力強く

ある時は軽い力で

一つ一つ壊していくことなのかもしれない

一つレールを敷いて

なんだか違うと思ったら

別のレールを敷き直せばいい

何度でも 何本でも レールを敷き直せばいい

一度決めたら 変えてはいけないことはない

それも 一定の人だけの価値観でしかない

ただ一つ

死 を選ぶことは違う気がする

死んだところで

キミを苦しめた人は苦しめない

死んでしまったら

苦しみを乗り越えた後のキミが

穏やかで優しい光を見ることはできない

これは

ボクの価値観でしかないかもしれないけど...

見返すために生きるのではない

キミが楽しいと思えることを

やらされるのではなく やるために生きる

辛い思いをさせた人達を

忘れるまで やる

忘れられないということは

キミがまだ そのことに没頭できていないということ

向き合い切れていないということ

忘れられないにしても

思い出さない時間を増やせたかどうか

感情に振り回されないようになれたかどうか

その指針にすればいい

おそらく今

キミはとても疲れているだろう

その疲れを取ることが最初にやること

まずは一日

目を閉じて

自分の心に語り掛けよう

「がんばったね

やるだけのこと やったよね」 って

何度も何度も言ってあげよう

そんな日を

しばらく続けていると

少しずつ元気になる

前を向ける日が必ず来る

キミなら 必ず。

恋するキミへ

<http://p.booklog.jp/book/101461>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101461>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101461>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ